

博士學位論文要約

論文題目： 近世京焼の考古学的研究

氏名： 角谷 江津子

要約：

題名 近世京焼の考古学的研究

本論文は、遺跡から出土した京焼について、その概念を考古学的に検討し、年代的考察すなわち編年研究をおこなうことによって、京焼の実体と歴史の変遷の解明を目的としたものである。本論文では、京焼を「京都において近世に生産が開始されたやきもの」と定義した。なお京焼の生産は近代すなわち明治期を経て今日まで継続していることは周知の事実である。

京焼について、京都を生産遺跡であり消費地遺跡の一拠点とみなす。京焼を出土陶磁器の一部を構成するものと認識し、遺跡出土の京焼を考古学的方法によってその特徴を抽出した。具体的には一括遺物を検討・分析しその変遷をたどるという研究方法をもって、編年的研究の成果を発表することを目的とした。京都市内の京焼消費遺跡として、同志社校地と平安京左京北辺四坊（公家町）をその中心としている。

本論文の章構成は、序章 京焼研究史、第1章 京焼以前-寺院址出土の天目碗-相国寺京南蛮寺 信行寺-、第2章 京焼の生産-近世京都における窯業生産の開始-、第3章 肥前京焼風陶器と京焼、第4章 同志社校地出土の京焼-その組成と年代観-、第5章 近世京都出土の信楽焼と京焼、第6章 平安京左京北辺四坊（公家町遺跡）出土の京焼、第7章 禁裏御用品としての京焼、第8章 常盤井殿町遺跡（旧二條家邸跡）出土の京焼、第9章 近世京都出土の京焼-その編年、終章-近世考古学の発展が考古学研究にもたらしたもの-とした。この内容に、附篇Ⅰ 遺跡出土の「小町紅」銘容器-小町紅の流行と江戸時代後期の紅化粧 - 附篇Ⅱ 旧柳原邸遺構と草創期の同志社女学校-出土陶磁器が語る京都の近代-を加え、京焼市域出土の幕末期の紅容器とヨーロッパ産陶器の研究から、京都の消費地としての性格をよりよく認識するための一助としている。終章は、-近世考古学の発展が京焼研究にもたらしたもの-と題してまとめた。

序章の研究史において、1960年代の研究では楽焼は桃山時代、京焼は江戸時代の作品とみなされ、両者共に印銘を記したことが評価されていたと述べた。60年代後半に「初期京焼」、続く70年代に「古清水」の概念が形成されて研究が進展した。考古学では69年に日本考古学協会総会研究発表において「近世考古学」が提唱された。学校法人同志社では早くも72年に校地の発掘調査に着手、73年には同志社大学の森浩一教授が中心となり京都市中京区の姥柳町遺跡（京南蛮寺跡）を調査した。80年代以降、近世遺跡を対象とした調査が増加するにともない、出土陶磁器の分類と年代的考察が本格的に開始した。東京で江戸遺跡研究会、関西で関西近世考古学研究会が設立され研究者の交流も活発となった。

第1章は、同志社新島会館別館地点の調査において近世の遺構から大量の国産天目碗が

出土したことから、この背景となった歴史について研究したものである。『蔭涼軒日録』から中世寺院の儀式としての茶礼のありかたを述べ、遺物の出土状況を姥柳町遺跡（京南蛮寺跡）と比較したうえで『日本イエズス会礼法指針』から読みとれる、宣教師がみた当時の日本の茶について言及し、さらに相国寺旧境内遺跡の既往の調査成果と比較して『津田宗久茶湯日記』から織田信長の茶会をみて相国寺における喫茶から茶の湯への展開を研究した。近世寺町地域の日常における茶の風習は、茶礼、喫茶、茶の湯とは異なる質素なあり方を示すことが知られた。茶の文化史を考古資料から明らかにしようとする場合、文献の記録との異同が多くなる。史料に書かれない茶の姿と茶陶についてその一端を考古学の方法によって示した。

第2章では、京焼の生産の実像について検討した。高火度焼成による京焼生産以前に窯業生産が開始され、京都で軟質施釉陶器を生産したことを述べた。京都においてはまず軟質施釉陶器の生産が始まり、その後元本能寺南町出土品にみられる、注文に応じて茶陶を中心に多様な意匠でまとまった量の軟質施釉陶器を生産した様相、東八幡町では軟質施釉陶器の生産を継続しつつ京焼をも生産していくという様相を明らかにした。数種の印銘が存在することから上絵付の目的で複数の窯場から陶器の素材となる素地を持ち込んだと推定され、これが当地における窯業生産の実態を示すものであったと結論した。考古学では小規模な内窯による低火度焼成の軟質施釉陶器と登窯導入以降の高火度焼成＝本焼による京焼生産という分類をおこなっていた。研究史において京焼の範疇に楽焼をふくめないという慣例、慣習に対して、考古学がこれを明確にしたことは特筆すべき成果であったといえる。

第3章では、肥前産京焼風陶器と京焼の比較研究から、肥前産京焼風陶器を「京焼の丸碗と平碗という器形のみを模倣し、文様は京焼にはあまりみられない楼閣山水文を鉄絵によって画一的に描き、京都の窯名の「清水」だけをとりあげて製品に押印したもの」と定義した。肥前の生産遺跡の出土状況から、新島会館地点出土の肥前産京焼風陶器が鍋島藩窯で生産されたものとし、1680年代頃から18世紀前半頃の京都における、生産地を異にする両者の消費の状況をあらわすものであると論じた。肥前産京焼風陶器が「清水」印銘を採用したことについて、共伴する京焼が「清水」印銘をもたなかったことから肥前産京焼風陶器出現期の京焼研究をすすめた。『隔莫記』『入道真敬親王日記』に清水焼の記事を見出し、伝世資料中の「清水」印銘作品が江戸時代初期から中期にかけて京都で製作された「古清水」と総称されている陶器の中に存在することから、新島会館地点出土の京焼が古清水の範疇に入るものであることを確認した。なお、典型的な京焼風陶器の生産は短期間に限定され、消費地遺跡において遺物群の年代観を想定する場合に指標となる遺物であると述べた。肥前京焼風陶器は今や近世考古学の共通認識となったが、その発見が出土資料としての京焼研究の起点となったことを確認しておきたい。

第4章は、同志社校地出土遺物の検討にもとづき、京焼を分別する基準を提示したものである。①色調②胎土③器厚④器形⑤装飾⑥意匠⑦文様の7要素をあげ、同志社校地の8地点出土の京焼についてこの7要素を研究し、年代的考察を試みた。③の器厚が薄いものから厚いものへと変わり④の器形では丸碗・平碗・変形皿に杉形碗・火入・半筒形碗・筒形碗・蓋類があらわれ⑤の装飾技法では銹絵染付に色絵が加わり、さらに銹絵のみや白泥に

よる装飾がおこなわれ⑥の意匠では草花文主体から無文の製品が出現し、⑦の筆致では精緻な描法から、鉄顔料によって塗りつぶす、一筆で大まかな描き方となる、といった時期差による変遷をとげていることを明らかにした。銹絵染付技法の出現については、同志社校地では色絵破片のみ共伴か同時期、左京北辺四坊では銹絵染付が先行することを確認し、⑤の装飾について銹絵染付主体と結論している。

第5章は、近世京都の遺跡出土の京焼と信楽焼を主題とし、京都市域の27地点出土の信楽産施釉陶器と共伴遺物を取りあげて考察したものである。京都市域では18世紀中頃から信楽産施釉陶器の灯明皿、鍋蓋が出土し、この時期から京都で流通したものと考えた。同一器種の中に京焼がみられ、両者が併用して消費されたと考えられる。灯明皿・鍋蓋はこれまでの京焼になく、京焼と判断する基準からはずれており京焼の器種拡大とみなした。信楽産施釉陶器は胎土が緻密で硬く焼成され規格性をもつ。京焼は一時的に普及品の生産を試みるが量産に移行せず、信楽産施釉陶器にこれを委ねるという様相を明らかにすることができた。なお、京焼と信楽産施釉陶器の識別について、京焼には第4章で提起した要素を基準とし、生産地と断定しにくい遺物が増加する状況においてなお京焼の要素を多く提示できる遺物を京焼系陶器、信楽の生産遺跡出土遺物と共通する要素を多く指摘できる遺物について京都・信楽系陶器とする。

第6章は、左京北辺四坊（公家町）出土の京焼について報告書で採用された「基準資料」と「主要遺構」を中心とした2つの年代観を再検討し、XI期古段階からXIV期中段階まで、一遺跡出土の軟質施釉陶器ならびに京焼の消費状況について四期11段階にわたって編年をおこなった。京焼の変遷をたどれば、18世紀代に「京都・信楽系陶器」と呼称される時期（京都から信楽へ量産器種の生産が移行する時期）を経て、京焼は装飾技法と印銘において新たな展開をみせ、器形では煎茶具が中心となった事実を知ることができた。出土陶磁器の一つとしての京焼とは、日々の生活で使用される器を中心とするものであったことを再確認した。

第7章は、禁裏御用品の京焼について、左京北辺四坊（公家町）の調査で出土した遺物を対象として研究したものである。禁裏御用品の京焼はXII期中段階から出現し、XIII期古段階と中段階には出土せずXIII期新段階で再度現れる。共伴した他の京焼と比較しその変遷をたどれば、禁裏御用品の京焼は「信楽における施釉陶器生産の影響を受けることなく京焼の伝統的な器形を保ち、古来の銹絵染付技法によって天皇家を象徴する意匠である16弁菊花文の装飾を踏襲するもの」と結論づけられる。これはまさに、普及品が存在せず量産を目的としない、京焼の典型的な姿であったといえる。

第8章では、常盤井殿町遺跡の調査で報告された土師器の編年案をもとに、新たに出土した京焼と当遺跡の既往の調査で出土した京焼について比較研究をおこなった。当遺跡において京焼が出土するのはI期新段階から、信楽産施釉陶器が出土するのがII期新段階からである。I期新段階で丸碗、向付、火入、II期古段階で平碗、鬚水入、中段階で半筒形碗があらわれ、装飾では色絵・金彩と銹絵・銹絵染付が同時にあらわれ、白泥、白化粧染付へと展開することが判明した。II期新段階から信楽産施釉陶器が出土することを述べ、さらに当地における半球型の丸碗と若松文碗の共伴関係を明らかにした。

第9章は、第1章から第8章までの研究結果をふまえ、上京地域を中心とした京焼出土

遺跡を総括し、各遺構・遺跡の対照研究をおこなったものである。この研究をもとに、同志社校地出土の京焼について0段階～Ⅵ段階までを設定し、左京北辺四坊（公家町）出土の京焼の年代観をあわせ表にまとめた。0段階以前に高火度焼成鉄釉碗、0段階から丸碗、平碗、鉢、向付、火入、容器等の器形が出そろい、Ⅰ段階で研究の対象とした全遺跡において京焼が出土する。Ⅰ段階後半に相当する左京北辺四坊ⅩⅡ中段階で京都産の鍋と灯明皿が出現。器形が多様となり印銘に「音羽」が入り文様の筆致が精緻なものと類型化するものに細分され、盛り上げ・塗りつぶす・白泥・鉄による太筆の新描法を確認した。Ⅱ段階では器形に杉形碗が出現。前段階と比較して器壁が肥厚するが装飾は錆絵染付、色絵ともに精巧な筆致が継続する。Ⅲ段階においては前段階の京焼よりさらに肥厚し調整が粗い丸碗・半筒形碗、半球形丸碗・灯明皿等、信楽で生産されるもの原型と考えられる器種が出現する。Ⅳ段階では信楽産施釉陶器が大量に出土する。「錦光山」銘継続。装飾において白化粧染付、白化粧に緑彩・褐彩・青絵の新技法出現。Ⅴ段階では京焼の印銘は「霞晴山」「錦光山」「岩倉山」など山号を使用する。Ⅵ段階では陶工銘をもつ染付磁器が出現する。煎茶具は在銘で、陶家名を施す京焼の伝統を踏襲する。

終章においては、序章から第9章までに述べた研究成果を基礎にして作成した京焼の新編年試案を検証し、さらに全章を通読して浮上する課題を指摘した。第一は考古学の先学が当初から京焼の「モチーフ」「造形感覚」を認識しており、これは考古資料と芸術作品の比較研究の重要な視点となるということである。第二は京焼を消費した「幅広い需要層」における階層の問題で、これは廃棄の段階を経た「出土遺物」と、廃棄されず伝世した「作品」という分類につながる。のみならず、この階層差は京焼生産における注文品と町売りの差異の問題をも喚起する。

京焼の考古学的研究は、従来の京焼研究（作品研究・作家研究・文献研究）に対して、考古学的な年代観を与えただけでなく、出土遺物としての新資料を数多く紹介した。近世考古学の発展が京焼研究ひいては陶磁器研究にもたらした成果はじつに大きかったのである。

付篇Ⅰは、遺跡出土の小町紅銘紅容器について考察したものである。京都では18世紀半ば頃に白磁紅皿と色絵紅猪口、18世紀末頃に赤絵の紅猪口が出現する。はじめ商標は「京都本家小町紅」、江戸時代後期に「小町紅京都四条遍に平」が出土し19世紀代まで存続する。江戸遺跡では18世紀第4四半期から出現し19世紀第1四半期に「小町紅京都四条遍に平」「たかき」「いせ五」、19世紀第2四半期に「新町本家お笹紅」、19世紀第4四半期に「大坂心斎ばし筋」がみられた。「小町紅」が20世紀まで販売されていたことが遺物から明らかとなった。関西では大坂城周辺から「小町紅」「大坂新町笹紅屋」兵庫津遺跡から「兵庫通上」明石城武家屋敷では「大坂新町お笹紅」、滋賀県肥田城遺跡から「の吉」「小町紅」、彦根藩家老屋敷から「小町紅」と描く紅猪口が出土している。「紅皿」と「紅猪口」が遺跡で共伴し、「小町紅」商標があることで紅容器と特定される。紅猪口は商標が書かれた店に持参して買ったものと推察し、商標はこの目的で記されたものであると結論した。「小町紅」は近世後期の京都を代表するブランドとして成立した、これは近世京都で生産された京焼と同様である。出土した「小町紅」容器は江戸時代の文化史について京都を基点として研究する場合の鍵となる考古資料であり、その価値は高いものと考えた。

付篇Ⅱでは、幕末から明治期の近代京都の遺跡出土遺物について研究した。左京北辺四

坊の発掘調査において柳原家の屋敷地からイギリス製水差・皿が出土した。水差と皿はプリントマークから操業期間が前者は 1862 年～1882 年、後者は 1867 年～1875 年と判明した。出土遺構の年代は 19 世紀中頃と報告されており、輸入後時をおかずに廃棄されたものと推定した。柳原家は明治 2 年（1869）に東京に移転、この屋敷を新島襄が借入れ明治 9 年（1876）から女子教育を開始した。翌年女学校は新校舎完成にともなって上京区寺町西入の現在地に移転した。このことから旧柳原邸跡発掘調査で検出した遺構は、廃絶年代を柳原家東京移転の明治 2 年（1869）と女学校移転の明治 11 年（1878）の 2 時期に設定することができる。出土したイギリス製水差と皿は、実用性と廃棄年代から女学校に関わる遺物である可能性が高いと結論した。近世を対象とした考古学から、近代を対象とした「近代考古学」を標榜する時、京都は東京と並ぶ重要都市である。この近代考古学は他の時代を対象とする考古学と同様に、歴史学の発展に今後大きく寄与、あるいは主導していくものとする。

主要参考文献

『京都市中京区姥柳町遺跡（南蛮寺跡）調査概報』同志社大学文学部文化学科考古学研究室 1973 年。

『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅰ 同志社大学校地学術調査委員会 1977 年。

『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ 同志社大学校地学術調査委員会 1978 年。

『蔭涼軒日録』眞蘂著 玉村竹二・勝野隆信校訂 竹内理三編『増補続史料大成』臨川書店 1978 年。

大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989 年。

『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1990 年。

『京の公家屋敷と武家屋敷-同志社女子中・高校静和館地点、校友会新島会館地点の発掘調査-』同志社埋蔵文化財委員会調査報告Ⅰ 同志社埋蔵文化財委員会 学校法人同志社 1994 年。

小森俊寛・上村和直「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年。

『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 年。

『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会 10 周年記念-』九州近世陶磁学会 2000 年。

『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2003-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003 年。

『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2004-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004 年。

『平安京左京北辺四坊-第 2 分冊（公家町）』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 22 冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004 年。

『京焼-みやこの意匠と技』（展覧会図録）京都国立博物館 2006 年。

『常盤井殿町遺跡発掘調査報告書-近世二條家邸を中心とする調査成果-』同志社大学歴史資料館調査研究報告第 8 集 同志社大学歴史資料館・同志社女子大学 2010 年